

9月の支援活動に参加して

—万石浦ライオン学校支援の参加者感想—



6月中旬からの3ヶ月間で5回支援に入り、子どもたちの変化・自分自身の変化をひしひしとを感じるようになった。変化したことにより、いままで見えなかった・感じなかった問題があることにも気がつくようになった。また、見えていたもの・感じていたものがなくなったものもある。

子どもたちの変化として一番強く感じるのは、大人との接し方がうまくなっていることである。特に甘え方を覚えたように思う。例えば、逃げ回って追いかけてもらうことで「かまってほしい」とアピールしていた子は、まずは「ねー、ねー！」と話しかけるようになった。さらにいつのまにかボディタッチをしていて、ぴったりと寄り添っている。他に感じることで、小4や小3の子が小2の子の面倒をみるようになったことがある。自ら手をつないで一緒に歩いたり、漢字を教えていたりする姿を見ると「しっかりしたお兄さん・お姉さん」に見える。しかし面白い事に、面倒見が良くなったこの子たちは末っ子という共通点がある。

あまり良くない変化としては、嫌なことや苦手なことから言葉巧みに逃げ出すようになったことがある。もともと集団の輪に入りづらい子どもは、「気付かれない存在」であることを利用して嫌なことから自然に逃げている。さらにそれを「嫌なこと・苦手なこと」ではないかのようにおしゃべりでかわしている点がある。これは振り返りの時間を活用して、しっかり状況を把握することが必要だと思う。

わたしの変化は、子どもとの距離感がつかめるようになってきたことが挙げられる。その反面、「適当に相手をする・面倒くさいことはしない」ことがある。初回では、とりあえず子どもに嫌われないように言う事を聞こうとしていたが、今となってはなぜかなんとなく感じる雰囲気、で、「適当・面倒くさい」を活用したわたしの考えをはっきり言うこともある。もちろん、うまくいくこともあれば全く効果ナシのこともある。なにが良くて、なにが悪いか。わからないからこそ、相手と行動することが楽しいと思うようになった。

支援を通じて、全体の問題点を感じることももちろんある。どうやって改善するのか、わたしがそれを提案していいのかわからなかったが、「問題」と感じたものを共有することが“集団”には必要なのだと考えるようになった。支援者の入れ替わりが多いことで、情報の共有がしっかりと出来ていない点があるのではないだろうか。大元では、「そうしているはずだ、そう決まったはずだ」と思っている些細なことも共有されずに問題になることもある。また、指示待ちしていることも問題である。周りの意見は聞かずに、中心的存在が言った事でしか動けないのである。“誰が言ったのか、誰が指示したのか”ではなく、“どうしたら時間を無駄にせず次の行動にうつるか”を考えながら行動したいとわたしは思う。終電で帰りたいのなら尚更そうしたい。今後は情報共有のツールを作成し、どんどん活用していきたいと考えている。

(村田仁美 和光大学学生)

子ども達の気になる様子として、お盆明け三日間の支援後のミーティングでは子ども達の「暴力」と小6の女の子に対する他の子ども達の関わり方が話題に上がった。他の支援者によると修学旅行を境に「暴力」は減ってきたと言われる。確かに以前に比べれば支援者とのコミュニケーションとしての「暴力」は少なくなっているのかもしれないが、私自身今回の支援に参加してみて、暴力が減ったという感覚は得られなかった。自分の思うように事が進まない時、注意をされた時など、言葉で反抗するのではなく、暴力によって支援者に反抗している場面や、自分のモヤモヤした気持ちのはけ口として、小6の彼女に対して叩いたり、暴言を言ったり、からかったりしてしまうようなことが多々見られた。彼女の抱える様々な問題から万石浦ライオン学校という集団の中でも、彼女が下位的な立場に置かれてしまっているという子ども達の関係性が今回の支援中にも見られた。

このように子ども達の気になる行動はいくつかあるが、確実に子ども達が成長している姿も見られた。前回参加した7月の支援の時では10人くらいで野球を始めたときに、自分の思い通りにならなければそれぞれが拗ねて放棄してしまい全く野球が成立しなかった。しかし今回の支援では、2人のキャプテンを中心に子どもだけでチーム決めをし、運動が苦手な男の子や女の子、支援者も含めて集団遊びとしての野球をみんなで行うことが出来た。集団遊びの成立が意味することは、集団の中で自分の感情を優先するのではなく、自分の感情を抑え他者との関係を築くことが出来るようになってきたのではないかな。

このような子どもの変化は修学旅行以降行っている振り返り活動が要因の一つとして考えられる。普段の学校、家庭であったことや一日の活動を振り返って自分の思いを言葉にする活動を通して、自分の感情を暴力や拗ねることではなく言葉で表現することによって、言葉による関係の築き方が出来るようになってきた。こうした子ども達に自分の言葉を持たせていく支援を行っていくことによって、暴力や小6の彼女との関わりなど現在気になっている子ども達の行動も減少していくのではないだろうか。

これまで支援が継続できるのか、また自分自身定期的に参加できるのか曖昧であった。そのため、子ども達に対して自分に何が出来るのかということを考えながら支援を行ってはいったが、ボランティアとして子どもと関わる責任ということを強く意識してはいなかった。しかし今後も定期的に支援を行えることになり、子ども達に対する支援の方向性も固まりつつあるなか、今回の支援を通してボランティアとして子どもたちの支援を行う責任を感じた。万石浦ライオン学校の子供たちが自ら自分の言葉を持ち、自立できる力をつけていけるような関わり方や自分の責任を常に考えながら今後の支援を行っていききたい。

(保坂克洋 立教大学大学院学生)

終わりなき支援活動 ～中学校教員として～

阪神淡路大震災の復興が約16年かかった。今回の東日本大震災の完全な復興まで、阪神淡路大震災と同じくらいの期間、またはそれ以上かかると言われています。そのことから、東日本大震災の復興の中心は、今の中高生になっていくと思います。そこで私は今できることの一つとして今の中学生にこの震災のことを伝え、考えさせていくことができると考えました。

神奈川で生活している中学生と東北の被災地を少しでも繋げることができるパイプになり、中学生が今できることはないか、震災を忘れないでほしい、成長したときに被災地のために何かできることはないだろうかということを考え、行動に移す生徒がでてほしいと思っています。中学生の中には「石巻に行った」や「東北の親戚の家の片付けの手伝いに行ってきた」と夏休みを利用して、被災地を見てきている生徒がいます。その感想として「まだまだ大変そう」や「想像以上だった」と言っていました。また、国語の弁論についてもこの震災をテーマに仲間の大切さや地震の怖さについて述べている生徒もいます。このように、震災を忘れずに生活している生徒もいるので、教員もそのことを組み取りながら教育活動を行うべきではないかと考えました。

今回の石巻の支援へ行って感じ、生徒へ伝えたいことは大きく二つあります。一つは『遊ぶ場所の少なさ』です。「こっちに公園がある」という子どもの話を聞いて、一緒に歩いていると、そこに公園はありませんでした。また、別の公園に行くとそこは草が伸び放題で、遊ぶことができるような場所ではありませんでした。公園には仮設住宅が建ち並び、子どもの遊び場を整備する環境を整えるところまで、大人の手が回っていないのだと感じました。子どもに普段何をして遊んでいるのか聞くと、返ってくるほとんどの答えが家でゲームでした。なかなか外で遊ぶことができていない現状があるようです。また、野球をして遊んでいるときも、近くに住んでいる小学生が入ってきたり、傍観したりしていました。石巻の多くの子が、もっと外で集団で遊ぶことを望んでいるのではないかと感じました。遊ぶ場所がないというのは、子どもにとってやはりストレスになります。復興に向けて進んでいるものの、子どもの生活環境まではまだまだ手が回っていない現状があるのではないのでしょうか。

二つ目は女川町で見た「海の中の横断歩道」です。地盤沈下による影響で地震の前までは陸だった部分が海の中になっていました。女川町は約1m地盤が沈下しています。沈下したことで、山間部はあまり影響を感じないと思いますが、沿岸部はもちろん川沿いも影響があります。潮位や雨の影響で、河川の堤防から溢れ出しそうなくらいの水の量や、以前は歩くことができた場所が海になっている様子を見ることができました。普段の生活では支障がなくなったとしても、大雨や台風、潮位によって水位が変化するので、地震以前の生活を行うようになるまでには、様々な要因を考え考慮する必要がありますと感じました。中学校理科では一年生で地面の隆起や沈降について学習します。その分野で東日本大震災の地盤沈下に触れながら、道徳の要素を含みながら授業を行うことができるのではないのでしょうか。

このように、被災地にて感じたことを授業の中や道徳、学活の中で、生徒へ話をしたり、個別に話をしたりする中で、生徒に考えさせていきたいと思っています。初めは生徒にどのようにこの震災の話をするかという迷いもあったが、今では見たこと・感

じたことを伝えようと思えるようになりました。

また、石巻の子ども達と関わる中で、私自身の教員として生徒との接し方など、考えさせられます。今回の石巻支援の参加は修学旅行振りで、子ども達と会うのは約一ヶ月振りでした。土曜日の朝、子どもと会ったときが一番変化したように思いました。「あーふくしまだ」や「お久しぶりです」と挨拶してくれました。覚えていたこと、そこから自然に会話が生まれたことが大きな変化のように感じました。修学旅行前の子ども達の様子からすると今回の子ども達の様子はとても落ち着いているかのように感じ、万石浦ライオン隊が一つのチームになりつつあるように感じました。外遊びを行う時のみんなで野球をすることができていたことや野球のチームの発表をみんなが聞いていることなど、集団として同じ方向をみる時間が増えたように感じました。万石浦での私と子どもの関係、子どもと子どもの関係、集団の関係を、教員として私と生徒の関係、生徒と生徒の関係、学校・学年・学級・部活動の集団の関係を置き換え、考えていくことができました。生徒同士の関係を一番に置き、そこに私が少し介入しながら、集団を作っていきたいです。

復興に向けて行う支援については、終わりがないように感じます。ゴールデンウィークの後、夏休みの後など、支援者が急に減ったなどのニュースを聞いたりしました。しかし、ハード面やソフト面の両方にまだまだ大きな課題があるように感じます。その課題の裏にはさらに課題があり、その課題のすべてが解消するには、より多くの人ともっと時間が必要だと思います。そのためにも、長期的な復興支援を続ける必要があります。長期的に続けるためにも、現在の中学生が大人になったときの力が必要不可欠だと思います。次世代を担う中学生・感情豊かな中学生に伝え続け、将来的に今の中学生が復興の中心になってほしいと思います。また、いつか関東で起きると予想されている大地震についても同じように考えてほしいです。支援活動に終わりは見えませんが、一人の中学校教員として、この支援活動に参加し続けていきたいです。

ありがとうございました。

(福嶋良彦 引地台中学校教諭)

■万石浦ライオン学校の今後の予定■

- 11月活動 10月1-2日 勉強会、誕生日会、集団遊び、お月見
- 11月活動 11月5-6日 勉強会、誕生日会、ミニ遠足、合宿準備
- 12月活動 12月3-4日 勉強会、誕生日会、クリスマス会、合宿準備
12月下旬 合宿説明会
- 1月活動 1月5-7日 勉強合宿
- 2月活動 2月4-5日 勉強、誕生日会、合宿振り返り
- 3月活動 3月3-4日 勉強、誕生日会、卒業・進級に向けて

NPO法人教育支援グループ Ed.ベンチャー

〒242-0007 大和市中央林間 3-16-12-107

Tel/Fax:046-272-8980 e-mail: toiwase@edventure.jp

